

新版

No.3
2018 秋号

讃岐遍路道 曼荼羅寺道
西行と四国遍路

新
散策

善通寺

ふる里の風景を探る



空海の里を
再発見する

特集

四国遍路の
人気の秘密を探る





国史跡

讃岐遍路道

まんだらじみち
曼荼羅寺道

回遊型の巡礼路

文化庁が認定する日本遺産に登録されている四国遍路は、「四国に点在する弘法大師空海ゆかりの八十八箇所の札所を巡って四国を全周する全長 1400 キロメートルに及ぶ壮大な回遊型巡礼路」とされ、目的地を目指す往復型の巡礼とは異なり、回遊の終着点が発点となるため遍路を終えた自分の心の成長を確認できるところに特徴があります。また、四国遍路は四国の人々の日常風景として受け入れられており、周囲に

気遣うことなく、それぞれの思いをもって遍路を続けられます。

四国遍路の文化財は札所の八十八ヶ寺と遍路道から構成されます。文化財指定された建造物なども多く、遍路道の一部は国史跡に指定されています。讃岐遍路道では、曼荼羅寺道と根来寺道ねごろじみちが国指定史跡になっています。曼荼羅寺道は七十一番札所弥谷寺と七十二番札所曼荼羅寺を結ぶ遍路道で、山間部では丁石、石仏や石製の階段など近世のお遍路の面影が残る古道です。

千二百年の歴史

四国遍路は平安時代の真言僧や修験者による弘法大師修行の遺跡への巡礼から始まったとされ、西行、法然、一遍らが訪れました。西行の時代には、弘法大師信仰が世に知られ、西行は大師修行の聖地を明確に意識して善通寺近隣に止宿しています。札所を巡る遍路は中世に出現したと推測されていますが、江戸時代に海上交通の発達や弘法大師信仰の普及、さらに四国遍路道指南というガイドブックの出版によって一般民衆へと広まりました。四国の人々はお遍路さんへのお接待に功德があると信じ、食べ物や飲み物でもてなし、道案内するなどしてきました。

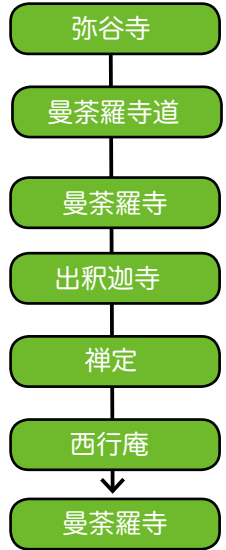
こうして、四国遍路は千二百年を超えて継承され、今では国籍や宗教、宗派を超えて、弘法大師とともに同行二人で一歩ずつ次の札所を目指す心の旅になっています。四国遍路は、弘法大師への「信仰」と修行を实践する「場」、それを支える「地域」の三者が一体となった世界に類をみない巡礼文化として位置づけられています。



四国遍路の絵図（江戸時代）



捨身誓願の聖地 (我拝師山)



人気の秘密を探る

四国遍路 曼荼羅寺道

空海の生誕地

弘法大師空海を信仰し、空海修行の遺跡を巡る遍路にとって、空海生誕の地である普通寺は特別の意味があります。唐から膨大な経典や法具とともに真言密教をもたらしたのみでなく、数々の奇跡によって人々を救ってきた空海も、人として生まれ、修行を積んだ、人間としての空海の伝説が残っているためです。特に、捨身誓願の地で空海が如来（御師）に出会ったという伝説は、真言僧のみでなく皇族や貴族にも知られるようになり、彼らの手によって普通寺や曼荼羅寺が庇護されるようになったようです。



獅子の岩窟（弥谷寺）

絶壁をくり抜いて経蔵所として使われた岩窟は、幼少の空海がその小窓（明星の窓）の明りで、昼夜を問わず経典をとりだして勉学に励んだ所と伝えられます。



曼荼羅寺の行箇所（現出釈迦寺奥の院禅定）



如来が示現した捨身ヶ岳

西行の足跡

崇徳院や後鳥羽院と親交のあった平安歌人の西行は、如来が示現した空海修行の地付近に止宿しました。

空海の遺跡巡礼の先駆け 西行と四国遍路

空海修行の地

今日見られる庶民の四国遍路は江戸時代の中頃から盛んになりましたが、四国の辺地は平安時代末期には修行僧たちの修行の地とされていたようです。新古今和歌集に多くの歌が撰じられた平安末期の歌人、西行もそんな修行僧のひとりでした。西行の歌集、山家集さんかしゅうの件で「四国のかたに修行しけるに・・・」と綴られたように、西行の四国あんぎゃ行脚は修行の旅であり、五色台の白峯にある崇徳院の墓参とともに真言宗の祖、空海修行の遺跡巡りに旅の目的がありました。諸説はあるものの、西行は我拜師山付近の水茎の岡に庵を結んだといわれ、そこで

数々の歌を詠みました。

西行が、「まんだらじの行だうどころへのぼるはよの大事にて、手をたてたるやうなり、大師の、御経かきてうづませをりましたるやまのみねなり、・・・それへ日ごとにのぼらせおはしまして、行道しをりましたと申つたへたり」と記したように、我



西行の腰掛け岩（我拜師山）



西行庵



西行の昼寝石（曼荼羅寺）

拜師山の禪定（行道所）は、当時すでに空海修行の聖地として知られていました。また、「やがてそれが上は、大師の御師にあひまいらせさせをりましたるみねなり、わがはいしさとその山をば申すなり」ともあり、我拜師山は修行する空海が如来（御師）に会った山として伝わっていたようです。さらに、「善通寺の大師の御影には、そばにさしあげて、大師の御師かきぐせられたりき」とあり、善通寺に如来が描かれた弘法大師像（p8 参照）が存在したことが分かります。我拜師山の近隣には、西行が同行所に赴く際に腰掛けた石や昼寝をしたという石などが残ります。また、西行が庵を結んだ場所には、地元有志の浄財によって西行庵が再建され、四国遍路の先駆けとも言える西行の修行の地を伝えています。

西行庵の風景

西行庵から一步踏み出ると、世尊である如来が現れた捨身ヶ岳から庶民が住む俗世界まで一望できます（写真下）。つまり、西行庵は世俗と世尊の狭間に建てられました。それでは、西行はなぜここに庵を結んだのでしょうか。西行は仏門にありながら、数多くの恋歌を読んでいます。一説には、世俗の煩惱を理解を示しながら仏法を説こうとする西行の説法と言われます。また、四国行脚の目的が修行であったことを考えると、西行は如来が現れたというこの山に強い関心を寄せたと思われます。ここで、世俗の人々を見つめることで、世尊の前で繰り返される世俗の煩惱に、ものの哀れを見いだそうとしたのかもしれませんが。



禪定（行道所）

西行庵から望む風景

「人間」空海のすがた

生誕地の風景



修行妻の弘法大師空海（善通寺）



出釈迦寺奥の院 捨身ヶ岳禪定（我拝師山）



経塚跡（香色山）

今も人々をめぐり歩く大師

「同行二人」と称して四国を遍路する人々は、お大師さんが一緒にいると信じ、そしてどこかでお大師さんに出会い、自分の肉体的または精神的苦しみから解放されること願って巡礼していると言われます。

四国遍路には、空海が今も生きており、人々の間をめぐり歩いているという弘法大師空海への信仰が見られます。空海は死に際し、弥勒菩薩のすむ兜率天とそつてんに往生し、衆生を救うために、弥勒菩薩とともにこの世に出現すると遺言したと言われます。そして、実は空海は入滅したのでなく、高野

山で永遠の瞑想に専念する入定にゅうじょうであったとされ、さらに入定所を離れて人々の間を巡っていると考えられました。また、弥勒菩薩が再びこの世で説法されるときに備えて、經典を土中に埋納する信仰が生まれしました。善通寺の背後の香色山山頂で発見された経塚もその流れを汲んでいます。

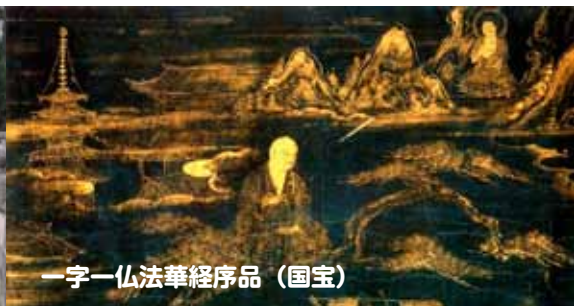
先の西行の山家集によれば、当時既に、若き空海は我拝師山に毎日登って行道し、またこの山の峰に埋経したと信じられていました。大師ゆかりの修行の地を巡る四国遍路の中でも、この地がいかに大切な所かを伝えています。

人間として修行する空海

弘法大師空海の伝記は六百以上あり、そのほとんどが真言僧らによって偶像化された空海にまつわる、奇跡に満ちた超人間的大師像であると言われます。しかし、善通寺に伝わる大師像には、人間としての空海を垣間みることができます。



みかげ
御影池（善通寺）



一字一仏法華經序品（国宝）

人間として修行する空海

弘法大師信仰が高野聖^{ひじり}などによって広まり、東寺長者の観賢^{かんけん}が始めたという御影供^{みえい}などから空海の肖像画（御影）に特別の意味が加わります。善通寺に伝わる御影は、西行の参詣時（1168年）には既に世に知られ、鎌倉時代には皇族や貴族の要請により度々上洛し、模写されるとともに、善通



弘法大師像

寺には寺領地が寄進されました。

弘法大師像には三種類あり、善通寺御影と呼ばれる図像には、讃岐の山中で修行する空海が如来に会ったという伝記が描かれています。この図像は善通寺に伝わる一字一仏法華經序品^{いちじいちぶつほけきょうじよぼん}の扉絵にもあり、そこには我拜師山や五重塔も描かれています。

寺伝では、善通寺御影は瞬目大師像^{めみくだいし}と呼ばれ、空海が入唐する際になごりを惜しむ母（玉依御前^{たまよりごぜん}）のために、池（御影池）に姿を映して描いたと言われます。また、法華經序品は1字ずつを空海が書き、その行間に菩薩を1体ずつ母の玉依御前^{たまよりごぜん}が描いたものと言われます。先の出釈迦寺奥の院禅定は、幼少の空海が仏門に誓いを立てて絶壁を飛び降りたという捨身誓願伝説の地として、また弥谷寺の納経所^{いそ}だったという獅子の岩窟は空海が学問に勤しんだ所として伝えられます。善通寺近隣には、人間として修行する空海の風景が広がっています。



子安大師

風景を楽しむまめ知識

大師像

弘法大師信仰が広まるにつれて、空海を伝承する肖像がつけられました。稚児大師、みろく彌勒大師、さば鯖大師、廿日大師、まんにち萬日大師などさまざまです。善通寺近隣でもいろいろな大師像がみられます。

修行大師（観智院）

善通寺の東院と西院を結ぶ通路に位置する善通寺塔頭たつちゆう観智院には、十一面観音が祀られ、安産や子育ての守護仏（子安観音とも呼ばれる）としてあつく信仰されています。その傍らに修行する大師像があります。この修行大師像は、昭和9年大師一千百年御遠忌の際に建立されました。一般に、袈裟・網代笠・錫杖・脚絆・草履の姿とさけさ あじろがさ しやくじょうれ、手に仏鉢・念珠・五鈷杵ごこしよを持した立像

といわれます。観智院の修行大師には、網代笠がなく、お大師さんの優しい顔を見ることができます。



笠松大師（曼荼羅寺）

笠松（金毘羅参詣名所図会）



笠松大師

笠松大師（曼荼羅寺）

曼荼羅寺には、かつて弘法大師がお手植えされたと伝わる樹齢1200年越えの「笠松」と称する不老松がありました。この松は、菅笠を二つ伏せたように見えたことから笠松と呼ばれたようです。しかし、2002年に松食い虫の食害で枯死したため、笠松の幹を使って讃岐一刀彫で弘法大師の像を刻みました。今では、多くの人々の信仰を集めています。



修行大師像（観智院）

稚児大師（善通寺西院）

空海が入定に際して門弟に与えたという御遺告ごゆいこうに記された「蓮華座に座して諸仏と物語る」という一節に基づいた図像や童子姿の大師立像があります。善通寺の西院に置かれた童子みすらの立像は、髪を角髪に結び、両手の掌で五輪塔を安置しています。



稚児大師像

求問持大師（出釈迦寺）

空海が四国八十八ヶ所ご開創のみぎり、一切の経法の文義を暗記できるという虚空蔵求問持こくうざうくもんじの法を我拝師山で修行したと伝われます。そのため、出釈迦寺を求問持院と号し、求問持の法を修する大師像が置かれています。



求問持大師像



吉原大池 さざなみ公園

入場無料。禅定を間近に見上げる位置にあります。広場のほかに、大池の水辺の上部を通る散策路が設置されています。大池の対岸には、赤門七仏薬師の元になる吉原七仏薬師堂があります。

身近な公園の景

禅定（行道所）を見上げる公園

弥谷寺から曼荼羅寺道を下ると、我拝師山と禅定がみえてきます。遍路道は吉原大池の傍らを通って曼荼羅寺へと向かいます。この吉原大池の北側に、吉原大池さざなみ公園があります。ここには、ブランコなどの遊戯設備のある広場の他に、大池の水生物を観察できる散策道が整備され、市民に憩いの場を提供しています。

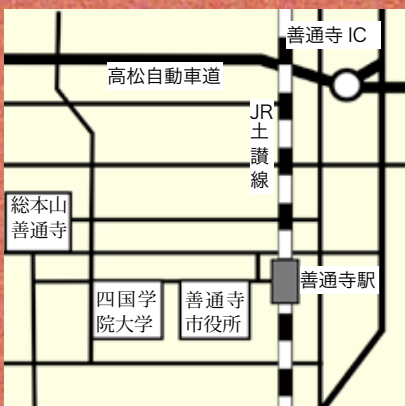
編集後記

今回は四国遍路における善通寺の重要性をテーマにしました。実際に史跡・曼荼羅寺道を散策し、さらに空海の修行の地とされる捨身ヶ岳に登るという道のりは、想像以上に厳しいものでしたが、その分強い達成感に包まれました。ここで訪れた寺院や道中では、完成された超人的な空海像ではなく、幼少期の伝説や修行の足跡など生誕地ならではのものが見つかりました。本誌で、人としての空海を感じていただければ幸いです。

四国学院大学2年 田井花音・鳥生ななせ



アクセス



バック・ナンバーは左のEP「散策 善通寺」より閲覧できます。

<http://shigakuweb.jimdo.com>

制作・お問い合わせ

四国学院大学 空海カフェ
(shigakuweb@yahoo.co.jp)

制作協力

善通寺市役所土木都市計画課
(Tel. 63-6314)

参考文献

みちくさ遍路 2001